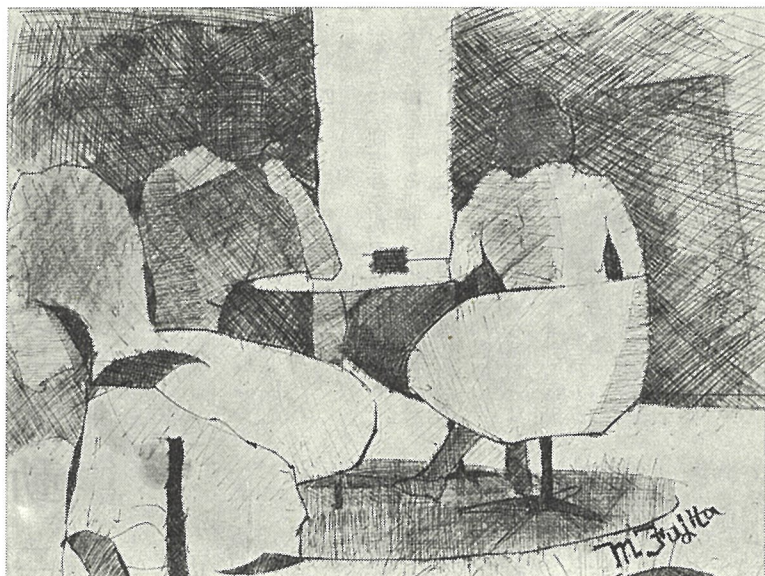




えと文

藤田宗敬

喫茶店

同志社大学のまわりには、多くの喫茶店があり、休み時間ともなると学生でいっぱいになる。喫茶店の壁につつまれた部屋は、まるで死すべき場がそこであるかの様に私を落ち着かせ会話を与えてくれる。そこにはまっ白に塗りつぶされた壁面があり、白く塗られた空間・時間・生活があり、タバコの煙がただよい、すべての音が白の中に吸収されている。

人間は白い壁と同一化し、彼の陰だけが彼の存在を主張している。このようなネガティブとポジティブの間の空間はこの世のものをすべてサインx、コサインyによって置き換えることを強いる。この変換は時間と空間とを葬り去り無限に続く白い面となる。その中に私の陰だけが取り残され、私の肉体を求めて捜しまわる——その白い面が崩れさり真の肉体が私自身のものとなるまで——。

(工学部四回生)